

---

# おじさんはロマンチスト

鉄下 学

---

## 注意事項

このPDFファイルは小説サイト「小説家になろう」で掲載中の小説を、「PDF小説ネット」の変換システムが自動的にPDF化したものです。この小説の著作権は作者にあり、作者または「小説家になろう」および「PDF小説ネット」を運営するウメ研究所に無断でこのPDFファイルおよび小説を引用を超える範囲で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止します。小説の紹介や個人用途での印刷および個人用途での保存はご自由にどうぞ。

### 【小説名】

おじさんはロマンチスト

### 【Nコード】

N7987B

### 【作者名】

鉄下 学

### 【あらすじ】

少女はお金に困っていた。働く口も見つからない。そこで、最期  
の手段を考えたのだが、これもなかなか思うようには行かない。そ  
こに、中年のおじさんが降って来た。

美和は、また職を変えることになった。

折角、友達が紹介してくれたコンビニ店員の仕事だったが、店長と折り合いが悪く、つい

「あんなんかがいる店でやってられねえよ！」  
と捨て台詞を吐いて出てきてしまった。

先週のことである。

何日間の給料は貰う権利はあるのだが、美和は取りになど行けやしない。

そんな性格なのだ。

財布の中には3万2千円と少ししかない。

明日には、アパートの家賃4万3千円を払わなければならない。

この街では安い掘り出し物件だったが、今の美和にはきつい金額である。

アパートの入居時に、「身分のしっかりした人でないとねえ」と  
大家さんに言われ、

「はい、ちゃんとデパートに勤めてますから」と言ってしまった。  
た。

確かにそのときはそうだった。

嘘などはない。

アルバイトだが、デパートの食堂のウェイトレスの仕事が決まっていた。

だが、それも半年と持たなかった。

人と、うまくやれないのである。

美和は、それは、自分が悪いのではなく、すべて相手が悪いものだと思っていた。

「ツイてないのだ」と思っていた。

どうしよう？

次の仕事を探してはいるのだが、これといって特技のない美和を雇ってくれるところなど、そう簡単には見つからない。

友達も、その殆どが、過去に仕事を紹介してくれたのだが、それをことごとく辞めてしまったのだから、今となっては紹介もしてはくれない。

このままだと、家賃どころか、食べるものを買うお金すらなくなってしまう。

美和は、昨日から、何度かテレクラへ電話をかけていた。

最後の手段だと思うのだ。

だが、2万円の金額を口にする、それだけで切られてしまうのだ。

「今時、何様のつもりだ」などと罵声を浴びせられることもあった。

その金額でもいい、という男も数は少ないがいるにはいた。

それで、実際に指定の場所に行ってみると、それらしき姿は見当たらない。

俗に言う「すっぱかし」である。

そうしたことばかりで、時間だけがどんどん過ぎていく。

今日こそ、何とかしなくては。。。

美和は、何も食わずにアパートを出てきた。

もう1円も使わない、そう考えて、小銭入れと携帯電話だけをポケットに入れていた。

兎も角も、少なくとも家賃に不足する1万1千円を何とかして。そればかりを考えている。

食べるとすれば、それを超える額が手に入ってからだと。

また、公衆電話を探して・・・と考えながら、河川敷にある公園の傍を通る。

手には、何軒かのテレクラの番号を書きとめたメモを握っている。

昨日のやり取りを思い出している。

2万円じゃ、駄目かも。

でも、それだったら、ふたりに抱かれなければ到達しない。

1万円だったら、ふたりと出会えるだろうか？

美和には自信は無かった。

処女ではないし、セックスの経験だってちゃんとする。

だが、それは、すべて相手が勝手にやっただけで、自分から仕掛けたことなど1度も無い。

ましてや、1日に、2度の経験も無かった。

1回だけで、くたくたになる自分を知っていた。

だが、今は、そんなことを躊躇している場合ではないのだ。極端に言えば、生きるか死ぬかの境目だと思う。

そんなことを考えながら歩いていると、その公園の中からひとりの男が飛び出してきた。

丁度、階段のあるところである。

美和がその男とぶつかった。体が吹っ飛ばされる。

「ごめんなさい！」

男は、大きな声で謝って、美和の傍に駆け寄ってくる。

「怪我はない？大丈夫？」

男は、かなり困惑している。

「ゴメンね、階段から飛べるか、試してたんだ。」

男は、そう言いながら、頭をかいた。

よく見ると、五十歳を超えたようなおっちゃんである。

美和は、その話を聞いて、つい吹き出してしまった。

五十歳を超えた中年のおっちゃんが、公園で、階段から飛べるかを試してたというのである。

なんとも滑稽な話である。

男は、美和が立ち上がると、その背中やジーンズの埃を払ってくれた。

「本当に、大丈夫？怪我は無かった？」

男は、なおも心配そうに聞いてくる。

「うん、大丈夫。じゃ、行くから・・・」

美和がそれで離れようとする、後ろから男が追ってきた。

そして、美和の前に回りこんでくる。

「しつこい奴」と美和は思った。

だが、男は、財布から札のすべてを取り出して、

「ごめん、これしか持ち合わせが無くて。」

と言って、千円札を何枚か差し出した。

「お詫びの気持ちだから。受け取って。」  
美和は驚いた。

ただ、ぶつかったただけである。しかも怪我をするほどでもない。  
なのに……と訝しく思う。

「嘘でしょう？からかっているの？」

美和は、口ではそう言った。

気持の上では、今にも両手が前に出そうなのだが。

「これって、お財布の中の全部でしょう？後で困らない？」  
と、男の顔をじっと見る。

男は、何事か頷きながら、

「あのねえ、実はこれからハロー（職安）に行くんだ。」

「おじさん、失業中なの？」

「そうだったんだけど、ハローからある工場の仕事を紹介されて  
いるんだ。」

「そう、それは良かったじゃない？」

「うん、けどね、給料も安いし、重労働なんだ。」

「でも、仕事あるだけ、まだよね。私なんか……」

「それで、それを受けるかどうか、あの階段で試してたんだ。」

「えっ！……どうということ？」

「5段のところから飛んで、こけなかつたら、この仕事やるつもり  
だ。」

「それで、私とぶつかったの？」

美和は笑えて来た。

「うん、君のお陰で、僕はこけなかった。君が代りにこけちゃった  
けど。」

「あははは……」

美和は本当に笑い出した。

「だから、これはそのお礼。じゃあ、そういうことで・・・」  
と、男は何枚かの千円札を美和の手に握らせて、元来た方向へと戻っていく。

美和は、振り返って、軽く頭を下げた。

そして、受け取った千円札を手の中で確認する。

そこには、10枚の千円札と2枚の五千円札があった。

ふと気付くと、手に持っていた筈の、テレクラの電話番号を書いたメモがなくなっていた。

(完)

(後書き)

この短編は、あるブログに『ロマンチスト』というタイトルで書いたものを加筆・修正したものです。

おじさんはロマンチスト

# 広告募集中

小説関連広告に最適です。  
出版社や印刷会社はもちろん、  
個人の広告でもOK

縦：140mm 横：110mm

詳しくは PDF 小説ネット広告募集をご覧ください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネットは2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7987b/>

---

おじさんはロマンチスト

2008年11月7日09時03分発行